

ふうちりん

平成17年2月28日 第48号 函館五稜郭病院 発行責任者 高田 竹人

病院理念 「安心」・「信頼」・「満足」を患者さまと地域に

基本方針

1. 当院は道南医療圏における急性期型病院としての役割を担う。
2. 外来診療は救急、紹介をメインとし、急性期入院主体の医療を提供する。
3. 信頼できる安全な医療、根拠に基づく質の高い医療を提供する。
4. 患者さまの権利を尊重し、対話と思いやりのある医療を提供する。
5. 地域の医療機関との連携を重視した医療を提供する。
6. 職員がやりがいと夢を持てる職場づくりを行う。

虚血性心疾患の新しい治療 薬剤溶出ステント

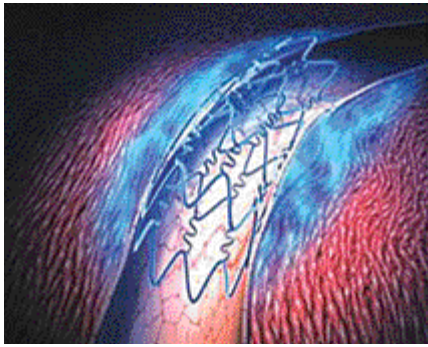
心臓に酸素や栄養を送る冠動脈という血管が動脈硬化により狭くなると、運動時などに胸が締め付けられるように痛くなります。このような病気を虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞などの総称）と呼ばれ、日本でも食生活の欧米化により増加の一途をたどっています。

虚血性心疾患の治療には、薬物療法、冠動脈インターベンション、冠動脈バイパス術などがあります。冠動脈インターベンションとはカテーテルを使った冠動脈の治療で、血管を拡げる器具の主流となっているのが、冠動脈ステントと呼ばれる、金属製のチューブです。この治療は患者さまの体への負担が少なく、確実に血管を拡げることができ、現在、わが国の虚血性心疾患の治療の8割をしめています。

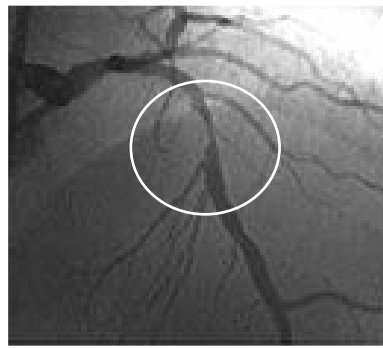
しかしながらこのステント治療には再狭窄と呼ばれる、治療した血管が再び狭くなる現象が20〜30%の頻度でおきるため、一部の患者さまには、何度も入院が必要となり、経済的にも負担となっていました。

そこでなんとかこの再狭窄を減らすべく、開発されたのが薬剤溶出ステントです。このステントは従来の金属ステントに免疫抑制剤などの薬剤が塗られており、長期間にわたり薬剤がステントよりしみ出し、再狭窄を防ぎます。このステントは2002年より海外で使用され、その成績は再狭窄の頻度が0.8%程度と驚異的であり、殆ど再狭窄のないステントとして全世界で使用されるようになり、日本では2004年3月に厚生労働省の認可を得て使用が可能になり、当院でも昨年7月より、このステントを使用しています。

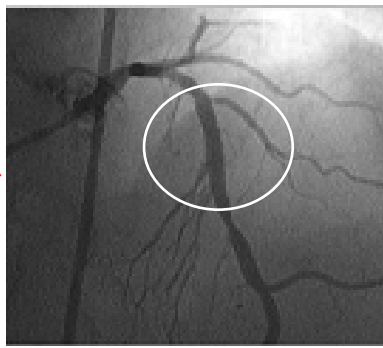
薬剤溶出ステントは長期にわたって再狭窄を防ぎます。



日本で使用可能となった薬剤溶出ステント(サイファーステント®)



薬剤溶出ステント使用前



使用直後



12ヵ月後

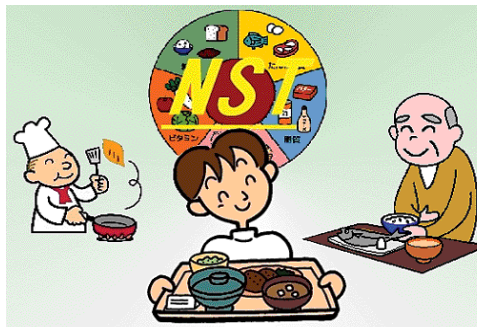
栄養状態を改善していくには、まず低栄養になる原因を探ることからはじめます。入院中の方であれば、病棟より連絡がきた際に食事量・病態などについての情報を得ます。その後、栄養士が患者さまのベッドサイドへ伺い、嗜好などを詳しく調査し、前回のシリーズでご紹介しました血液検査データ・薬と総合的に判断して、低栄養の原因がどこにあるのかを調べます。嗜好的な問題から食欲低下になっていく場合（見た目が多すぎて食欲が湧かない、油っこいものは食が進まない）



ステントに用いられる薬剤の量は微量で局所的に投与されるため、全身的副作用の心配は殆どありません。しかし従来のステントと同じように、治療後は、血栓による閉塞を防ぐため、抗血小板剤の内服が必要です。

薬剤溶出ステントでの治療により、虚血性心疾患の患者さまの病気の再発が減少することは確実です。従来のステントでは治療成績の悪かった病変にも積極的にこの新しいステントを使用することにより、良好な成績が期待されています。

詳しいことをお知りになりたい方は当院循環器内科医にお聞きください。
(循環器内科医長 北 宏之)



「ものを食べる」ことは、日々繰り返される当たり前のことです。その動作が全身に与える影響は大きく、人が本来もっている働きを十分生かすためにはとても重要なことです。食事に対して不安や疑問に思うことがある場合、それがストレスとなり精神的な面から食欲低下につながることもあります。患者さま一人一人とじっくりお話しし、食べることへの自信をつけていただくことも、栄養状態の改善へとつながります。

以上、これまでシリーズ4回にわけてNST(栄養サポートチーム)についてお伝えしてきました。当院で行っているNSTの活動内容・栄養管理の重要性についてお分かりいただけたのであれば、いかと思います。

なお、栄養サポート外来、個人栄養指導についてのお問い合わせは、主治医又は当院職員までお尋ねください。
(管理栄養士 大石 育恵)

「ものを食べる」ことは、日々繰り返される当たり前のことです。その動作が全身に与える影響は大きく、人が本来もっている働きを十分生かすためにはとても重要なことです。食事に対して不安や疑問に思うことがある場合、それがストレスとなり精神的な面から食欲低下につながることもあります。患者さま一人一人とじっくりお話しし、食べることへの自信をつけていただくことも、栄養状態の改善へとつながります。

「ものを食べる」ことは、日々繰り返される当たり前のことです。その動作が全身に与える影響は大きく、人が本来もっている働きを十分生かすためにはとても重要なことです。食事に対して不安や疑問に思うことがある場合、それがストレスとなり精神的な面から食欲低下につながることもあります。患者さま一人一人とじっくりお話しし、食べることへの自信をつけていただくことも、栄養状態の改善へとつながります。

初診時の 特定療養費について

当院では、平成17年4月1日(金)より、初診時に他の病院・医院・診療所の紹介状をお持ちにならない患者さまに限り、「特定療養費」1,050円(消費税込み)を徴収させていただきます。

但し、左記に該当する患者さまは特定療養費をご負担いただく必要はありません。

緊急に救急車などで搬送された方、夜間、休日などに緊急その他やむを得ない事情により来院された方

老人保険、公費負担医療及び医療助成制度の受給対象の方

生活保護受給世帯の方、及び社会福祉法第2条第3項第9号に規定する事業の対象となる生活困難世帯の方

労災等により治療を受けられる方

2年以内に当院で受診されている方(但し、内科と歯科は別に徴収させていただきます)

これは国の方針として、「医院・診療所いわゆる『かかりつけ医』」と「200床以上の病院」との機能分担を推進する観点から、「初期の診療は医院・診療所(かかりつけ医)で、高度・専門医療は病院で行う」ことを目的として、平成8年4月に厚生労働省によって制定されたものです。

当院は地域医療機関との連携を密接にし、外来診療は救急・紹介をメインとし、急性期入院主体の医療を提供すべく努めておりますので、何卒上記趣旨をご理解の上、ご了承いただきますようお願い申し上げます。
(病院長 高田 竹人)

口腔ケアの重要性



口の中を清潔にすることは、歯磨きなど「日常的に行われています。医療・看護では、口腔内を清潔にすること＝口腔ケアは、行わないことにより引き起こされるさまざまな問題を考えた時に、とても大切なケアだと位置づけられています。

なんらかの事情で口腔ケアが行われない、もしくは不十分な場合は、さまざまな障害がおこるといわれています(表1)。この中で特に注目されているのは、誤嚥性肺炎です。

以前もご紹介しました。誤嚥性肺炎は唾液・食物・胃内容物が気道内に流れ込むことで生じる細菌感染をいいます。特に高齢者では、誤嚥の自覚がないことが多く、主に睡眠中に唾液などに含まれる口腔内細菌が流れ込むことが肺炎の原因と考えられています。

十分な口腔ケアにより、誤嚥性肺炎を4割程度低下させることができたという報告もあり、口腔ケアで口腔内を清潔に保つことは、むし歯や歯周病の予防だけでなく、誤嚥性肺炎の予防につながり、健康維持のためにも大切であるといえます。

特に寝る前の口腔ケアを十分に行うことは、誤嚥性肺炎の予防に効果的と言われています。入院中の患者さまがご自分でケアができない場合は、食後・就寝前

口の中	起こる障害
むし歯ができる	歯肉炎になる
歯や歯肉に痛みや出血がみられる	口臭が強くなる
口腔粘膜が乾燥する	味覚が低下する
嚥力が低下する	嚥力が低下して気管が乾いて咳が出たり出血したりする
全身への影響	
誤嚥性肺炎	菌血症



口腔ケアを計画して行っています。通常はブラッシングやうがいでの介助・口腔内をうがい薬やお茶で清拭するなどを行っています。専門的なケアが必要な場合は、歯科口腔外科医師や歯科衛生士と共同でケアを行います。

ご自分で歯磨きや義歯の手入れ・うがいができる場合は、食後と就寝前に行うよう習慣づけましょう。

お茶に含まれているカテキンは、脂肪の分解を促進する以外に、口腔内を清潔に保つ効果もあるといわれています。看護師が口腔ケアを行う際にもお茶を使用することがあります。

食事の後にお茶を飲むという習慣は、口の中に残った食物を流し込み、口の中をさっぱりときれいにすることに加え、昔から病気を予防するための生活の知恵だったのかもしれない。

飲食物の中には、摂取することでお薬の効果を無くしたり、強めたりするものがあります。今回は、その中でもワルファリンについてご紹介したいと思います。

ワルファリンカリウム(商品名ワールファリン)は、血液を固まらせるのに必要なビタミンKの働きを抑えて、血液をサラサラにするお薬で、心筋梗塞などの血栓症の予防・治療や心臓の弁置換手術をした後などに使われます。他にも血液をサラサラにするお薬はたくさんありますが、ワールファリンは特に食事にご注意しなければなりません。

お食事にもお気遣いを！

ワールファリンについて

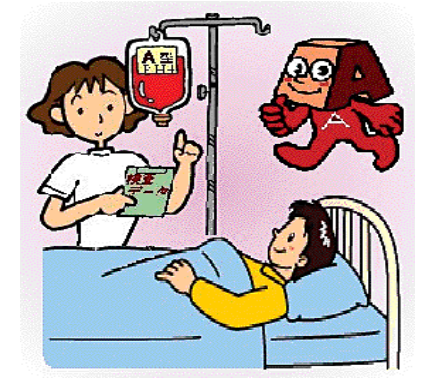
が必要で、ワールファリンの作用が減弱してしまい、特に納豆1パックには、大量にビタミンKが含まれているので、ワールファリンの効果を約3〜4日間ほぼ完全に無くしてしまいます。このことから、ワールファリン服用中の患者さまには納豆を食べないよう指導しています。健康食品の青汁やクロレラもビタミンKを多く含んでいるので、大量に毎日摂取するよう場合には、十分注意が必要になります。

また、ワールファリンはビタミンAやビタミンEの過剰摂取によって、ビタミンKとは逆にワールファリンの効果が増強してしまいます。ビタミンAやEを過剰に含む食品の摂取にも注意が必要になります。

飲食物以外に、メナテトロン(商品名グラケ)というビタミンKのお薬は、ワールファリンの効果を減弱させるので、ワールファリンとの併用を避けなければなりません。他にも、かぜ薬の一部やアルコールによっても影響を受けることがあります。

このように、ワールファリンは食事やお薬への様々な気配りが必要ですが、安心して服用するためには大切なおことです。お薬の飲み合わせ等について不明な点がございましたら、医師または薬剤師までお気軽にご相談下さい。

血液が生命維持に欠かせない大切な働きに関与していることは皆さまもご存知のことと思います。一般に、人の血液の量は体重の約7.7%、体重60kgの成人で約3800mlで、急な出血では循環している血液量の約1/3が失われると生命の危険を生じるとされています。命をつなぐため、安心して手術を受けるためには、医療現場において輸血の安全は十分に確保されていなければなりません。



輸血に関する医療事故の代表的なものにABO不適合輸血があります。平成9年4月に医師をはじめとした病院スタッフによる「輸血療法委員会」を発足し、マニュアルを作成して人為的なミス無くすよう安全な輸血療法対策に日々努力しております。しかし人為努力だけでは限界があるため、将来的にはベッドサイドにおいてもバーコードなどを利用した機器による患者さまと輸血前血液検査のための採血管および輸血パックなどの照合チェックが必要になることが理想とされています。

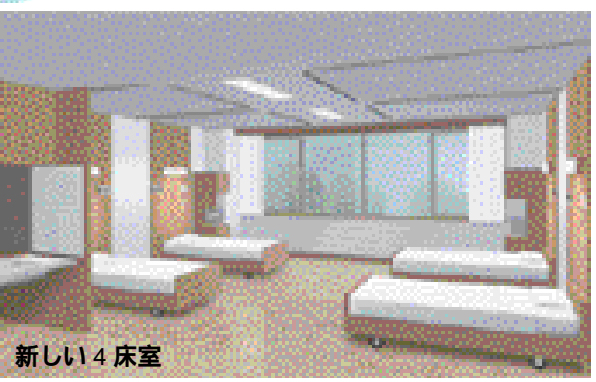
一般に聞かれていますB型肝炎およびC型肝炎などの輸血後感染症については、献血血液の高精度検査(核酸増幅検査「PCR」)でウイルス感染を減少させることが可能となり、日本においては平成11年10月からのPCRの導入により世界の各国に比べ安全性が高い血液が供給されていると言えます。当院では昨年1年間でおよそ1900人(7800単位)の患者さまへ輸血が行われましたが、重篤な副作用や輸血後感染症は発生しておりません。また、平成6年より輸血後感染症予防の一環として予め自分の血液を貯血し、戻し輸血する自己血輸血も実施しております(主に整形外科、泌尿器科、産婦人科など)。年間約120名の患者さまに行われ、他人が献血した血液を輸血に使用しない方法がとられています。

さらに平成11年2月より輸血後感染症の確認の一環として輸血を実施された患者さま全員の輸血前血液(血清)を1年間⁸⁰で冷凍保存し、輸血による感染の疑いがあった際にはいつでも調査できる体制を整えています。

今後、当院としては安全な輸血を目指して更なる安全強化を図って行きたいと考えております。(臨床検査技師 江口 敬子)

増改築NEWS

「病室のモデルルームが完成しました」



新しい4床室

本年6月からの利用開始をめざし新棟の増築工事がラストスパルトで進行中です。そんな中、昨年12月に新棟2階の一角に病室のモデルルームが完成しました。モデルルーム内にベッド等を置いてみて、設計段階で要求した病室の広さや機能が満たされているかを確認しました。

新しい病室は、白を基調とした壁に木製のベッドボードを組み合わせて、落ち着いた雰囲気となっております。また4床室でも患者さま一人一人に十分な療養環境を提供できるように配慮しました。さらにバリアフリーに対応したトイレ、シャワー設備を完備した個室を1病棟当たり10室といたしました。

新棟完成後も、既存棟の改修工事が今年の12月末まで続く予定です。長期にわたる工事、騒音、振動等ご迷惑をおかけしておりますが、何卒ご理解・ご協力いただきますようお願い申し上げます。(総務課企画係長 横山 峰要)